

書 評

Rebecca Styler, *Literary Theology by Women Writers of the Nineteenth Century* (Farnham: Ashgate, 2010)

市 川 千恵子

19世紀は福音主義を基盤とした慈善活動において、女性がリーダーシップを発揮し始めた時代である。そうした活動のなかには、女性運動の萌芽的要素が見出されるケースもある。また、この時代は豊饒な女性作家の輩出を経験した。識字率の改善による読者層の拡大という事実を鑑みると、社会の変革を希求する女性たちが、活字を人々の意識形成に働きかけうる媒体として積極的に利用し、議論の場へと変えたことも至極当然であろう。レベッカ・スタイラーによる本著は、キリスト教の信仰を精神的支柱に書かれた小説、伝記、批評、政治的文書、さらに詩という幅広いジャンルを横断し、女性作家が自己の経験と思考のもとに、いかに聖書を聖なる言葉から日常的な生の場の創造的な言葉へと読みかえ、家父長的な言説を書き直そうとしたのかを検証する。著者が取り上げるのは、アン・ブロンテ (Anne Brontë) を除けば、日本の読者にとって比較的マイナーな作家であるため、本著から得られる情報も多いはずである。まずはその概要を追ってみることにしよう。

ごく短い序章の後の第1章は、女性による宗教的著作物が受容された文化的文脈を詳細に論じている。ドロシー・マーミン (Dorothy Mermin) の *Godiva's Ride* (1993) によれば、教育と信仰は女性に「ふさわしい」テーマとみなされていたため、女性が比較的容易に参入できた分野であった。こうした出版事情と福音主義の隆盛に後押しされながら、女性作家はキリスト教の教義に新たな解釈を加えて、聖書を人々の暮らしに身近な言説へと変えていくことに寄与し、聖職者的な役割をも担おうとしたのである

(5-13)。第2章から各作家の分析に入るのだが、女性、信仰、書く行為の関係をマッピングする第1章がなければ、全体像はわかりにくくなっていたであろう。

第2章は福音主義の女性作家エマ・ワーボワーズ (Emma Worboise) の小説と伝記作品を扱う。ワーボワーズは実に多作であり、作品の多くが再版を重ねていることから当時の人気ぶりが窺える。この章では彼女の作家人生に転機をもたらす *Life of Thomas Arnold* (1859) と、その執筆後の作風の変化が検証される。“muscular Christianity” と結びつく人物を選択した理由は不明瞭なままだが、先行の A. P. スタンリー (A. P. Stanley) による伝記に依存しながら、トマス・アーノルド (Thomas Arnold) の生涯を再構成し、さらに彼の男性中心の宗教論を大胆に再解釈して、キリスト教に根差した行動規範における性差の境界を取り払うことがワーボワーズの伝記の意図のようである。例えば、彼女はアーノルドの指導者としての力量を、家庭における母親の言説に書きかえる。とりわけその偉大さを公的な仕事の達成にではなく、信仰心、道徳心、勤勉さという内面性に帰着させ、私的な部分へと読者を注目させることによって、アーノルドは性差を超えたキリスト教徒の理想像となるのである (28-34)。

第3章はアン・ブロンテの詩にみられる宗教観、特に信仰の懐疑と精神的葛藤を詳らかにする。アンは10代の半ばから亡くなるまでにゴンドルを含めて59作の詩を書いており、その多くが個人の精神的かつ宗教的な経験を主題とする抒情詩である。スタイラーはイゾベル・アームストロング (Isobel Armstrong) やマーミンらの先行研究を援用し、アンが葛藤する主体を提示することで、敬虔さや感受性の表現にみられる19世紀女性の詩の因習を打破したとみる (45)。初期の作品 “In Memory of a Happy Day in February” における福音主義とロマン主義からの影響の分析は秀逸であるし、晩年に書かれた詩が次第に理性に回帰する様相の分析も巧みである。しかし、アンが神の救済に対する不安や絶望という精神的危機を克服し、日常に聖なる価値を見出したのは実存主義者らしい現実的な解決法であるという見方には疑問が残る。著者は実存主義哲学の先駆者キルケゴールの個としての人間の概念を想定しているようだが、19世紀中葉の英国における実存主義の受容やアンとの関係についての説明が加えられていたならば、説得力を

増したことであろう。

第4章は collective biography のジャンルへと移る。この分野の研究は、アリソン・ブース (Alison Booth) の *How to Make it as a Woman: Collective Biographical History from Victoria to the Present* (2004) によって躍進したように思われる。19世紀の伝記は個人ではなく、複数の女性を取り上げた形態が多く、さらに対象人物を聖人化する hagiography が主流であった。例えば、19世紀中葉から後半にかけての女性の伝記のなかで、数多く登場したのがシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) やフローレンス・ナイトィンゲール (Florence Nightingale) であるが、彼女たちの仕事に潜む急進的な要素は見事に取り除かれて、若い女性読者に対する模範的女性像として表象されるのである。この章でスタイラーが分析対象として選択したのは、聖書に登場する女性の伝記である。ヴィクトリア朝の聖女伝において多く取り上げられたのは、イヴ、マグダラの MARIA、聖母 MARIA、デボラ、エステルなどである。例えば、イヴは非難の対象から救済され、強く、肯定的な人物像へと変容しており、イヴの物語を「罪の言説」ではなく、むしろ「成熟の神話」とするセアラ・ヘイル (Sarah Hale) の解釈は興味深い。また、クララ・ルーカス・バルフォー (Clara Lucas Balfour) は聖書の教えを女性主体に解釈し直し、人類の利益の名のもとに、女性が文化的な境界を打破することの意義を説く。こうした潮流のなかでも、洗練されたレトリックを用いたのがアナ・ジェイムソン (Anna Jameson) だと言えるだろう。彼女も数多くの女性偉人伝を執筆したが、スタイラーはジェイムソンの肖像研究に焦点を当てる。ジェイムソン自身の絵筆によるマグダラの MARIA 像や聖母 MARIA 像と達意の文章が相乗効果を生み、聖書の女性は知的で、力強さを併せもつ、フェミニストの理想像へと修正されるのである。

以下、第5章はハリエット・マーティノー (Harriet Martineau)、第6章はジョゼフィン・バトラー (Josephine Butler) と、女性による政治的著作へとテーマが移行する。マーティノーは1850年代に主要な雑誌でジャーナリストとして活躍し始めるのだが、1820年代から時折、ユニテリアン派の雑誌 *Monthly Repository* に寄稿していた。いわばジャーナリストとしての修行期の宗教色の濃い論説やフィクションがスタイラーの検証の対象となる。この時期のマーティノーは宗派のために書くという使命感を抱いており、読

者を活動的で教養ある市民へと啓蒙することを意図していたようである。初期の著作において彼女は、リベラルで知的な言葉を介して、イエスの教えを人々の日常生活での道徳的行為と結びつけ、社会の道徳的再生を希求しており、後の奴隷解放論や性病予防法批判においてもその精神は貫かれるのである。

マーティノーは 1869 年の年末に論説形式の 3 通の書簡を *Daily News* に寄稿し、性病予防法の非道性とこの法の撤廃を訴えた。1869 年の改正によって、実質上すべての女性を管理対象とした法の撤廃運動を全国レベルに進展させたのがバトラーである。すでにバトラーの政治活動と宗教との関係は、アン・サマーズ (Anne Summers) とヘレン・メイサーズ (Helen Mathers) の先行研究が明らかにしている。第 4 章との関連から、*Catharine of Siena* (1874) の読みに注目しておきたい。生涯を貧者の看病や救済に捧げたこの 14 世紀の修道女に、バトラーは自分自身を重ねている。特にカテリナの聖痕の逸話を「キリストとの完璧なる一体化」(151) として捉え、カテリナは社会の弱者のために行動を起こし、発言する近代的女性の理想像へと具現化される。だが、なぜ *Catharine of Siena* に関する数少ない先行研究であるサマーズの *Female Lives, Moral States: Women, Religion and Public Life in Britain* (2000) の第 3 章を参照していないのか、という疑問が残る。問題はこれだけではない。著者はバトラーの政治的著作に見出せる信仰の新しさを *Liberation Theology* と位置付ける。この教義はリマ出身の宗教家グスタヴォ・グティエレス (Gustavo Gutiérrez, 1928-) によって 20 世紀後半に南米から世界へと広められ、キリストの教えにより、不平等や貧困から人々が解放されることを主眼とし、現代社会の政治・経済への批判的要素も見受けられるのが特徴である。しかし、ここで必要なのは時空を隔てた宗教論との比較ではなく、時代の文化的文脈からバトラーの思考の急進性を明らかにする作業ではないだろうか。この章の議論において、バトラーを活動家ではなく、作家として検証しようとする著者の目的が十分に達成されているとはいえず、何よりもバトラーの著作のダイナミックな側面が照射されていないことは残念に思われるのである。

著者のキリスト教に関する豊富な知識と、多様な文献の読みの労による本著の達成には敬意を表したい。だが、筆者が感じた不満を二点だけ書き

添えておかなければならない。まず、二次文献からの孫引きが散見される。直に一次文献に触れ、全体像を把握することで、新たな気づきが生じる可能性もあるだろう。次に、各章の有機的な結び付けに十分な配慮がなされていないことが気になった。例えば、第4章での「女性は神に任命された道徳的代理人」というヘイルの読みは、バトラーの活動や著作ではさらに強調された重要な概念のはずである。各ジャンルと各作家の相関関係を可視化し、各章の有機的な繋がりを示せていたならば、本著はよりニュアンスに富んだ研究書となりえたであろう。